〈研究ノート〉

身体部位詞を対象とする破壊動詞の用法

——「こわす」「くずす」「つぶす」「くだく」の場合——

遠　藤　裕　子

要　旨

身体部位詞を対象とする「こわす，くずす，つぶす，くだく」についてコーパスに現れた名詞を調査した結果，身体全体，身体の特定の部位，身体の外形的状態，身体の内的状態を表す語彙が見られた。動詞句としては，分解可能なタイプと分解困難な慣用句とが見られ，前者においてはさまざまな語が使用されており生産性の高さが認められた。また，分解可能なタイプにおける動詞の拡張義は，4動詞とも破壊を表す基本義から直接意味拡張しており，語によっては典型要素が活きていることが明らかになった。

キーワード：身体部位詞，破壊動詞，分解可能な動詞句，意味拡張

1. はじめに

日本語には，「肩をこわす，膝をくずす，肝をつぶす」など，身体部位詞と破壊動詞が共起する一連の表現が数多く見られる。これらの動詞句には，慣用句とされるものもあれば，比較的自由な結びつきのものも見られる。しかし，動詞に関しては，いずれも物を破壊する基本義とは異なり拡張義で使用されており，身体部位詞の方も物として変化するわけではなく何らかの意味拡張が見られる。

本稿では，上述のような共起表現において，どのような身体部位語彙が

使用されているか，破壊動詞の基本義のうちどのような要素をもつ拡張義が使用されているかといった意味的特徴と，関連する統語的特徴とに焦点をあて，コーパスの用例を資料に用いて明らかにしたい。

2. 先行研究，および本稿の立場

本節では，以下４つの観点から，分析に関連する先行研究の知見を整理するとともに，本稿の立場を述べる。

まず，「身体部位語彙」であるが，これに関する研究は数多い。語彙をできるだけ多く収集しようと思えば，例えば山口（2003）では相当数に上るが，松本（2000）では，人間以外の生き物の部位を表す語を除くと，次のような語を挙げている[(1)]。

（1） 頭，面，目，耳，鼻，口，歯，髭，顎，首，肩，胴／胴体，腕，手，爪，腹，背／背中，脇／脇腹，へそ，股，尻，ちんこ，足，顔，髪，額，眉，頬，舌，喉，腿，臑，指，肘，胸，膝，踵

本研究では，用例から身体部位詞と判断されるものを拾い出すことが可能であるため，具体的な語彙を列挙することは上記にとどめる。これら外から観察可能な器官・部位に加えて，扱う範囲としては，「筋肉，肝」のように体の中にある身体部位の語彙（外科的方法で観察可能），「表情，正座」のように身体部位の状態を表す語彙，「声」のような身体部位の働きと深く関わる語彙を含めるものとする。その理由は，分析対象とする動詞句では，身体部位語彙も意味拡張しており，「表情，正座，声」がそれぞれ「顔，足，喉」といった語と類似した意味を表すといった場合が少なくないからである。

次に「破壊動詞」については，「こわす，くずす，つぶす，くだく」を

本稿では取り上げる。破壊を意味する和語の基本動詞としては他に「やぶる」があるが，身体部位詞との共起はあまり見られないため，ここでは取り上げない。また，「わる，切る」に関しては，分割・切断系の意味が基本であり，今回は対象に入れていない。

取り上げる4語に共通する意味要素としては，まとまりのある対象，外部からの力，形や機能の変化・消失などがあり，一方異なる要素としては，力の加え方，対象物の属性などがあり，詳しくは3節の分析で取り上げる。

3点目として，本研究の用例として取り上げる身体部位語彙と動詞の組み合わせには，一般連語句と慣用句とを広く含めることとする(2)。ただし，破壊動詞が身体部位を物理的に破壊するという基本義で使用される場合は対象としない。田中（2002）が主張するように，慣用表現はその構成要素から推測される意味とは多少とも異なる意味を全体として表すものではあるが，多くは「構成語の意味からある程度の動機づけが可能」（p. 5）であると考えられる。本稿では，慣用句の分類や範囲よりも共起状況に注目し，動機づけ，つまり基本義からの拡張のプロセスに焦点を当てて考察する。

最後に，統語的側面であるが，本稿では「Nが〈身体部位語彙〉を〈破壊動詞〉」の形を取り，Nが人間かつ身体部位の所有者である用法を主な分析対象とする。なお，日本語の慣用句には「腹を立てる／腹が立つ」のように意味するところは同じであるが統語的特徴の異なる対の慣用句があり，一般連語句においても同様の現象が見られる場合が少なくない。これについては，用例から見られる傾向などについて簡単にふれることとする。

3. 身体部位詞を対象とする破壊動詞の用法

本節では，「こわす」「くずす」「つぶす」「くだく」について，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を対象にNINJAL-LWP for BCCWJ（以下，NLBと略）を用いて用例調査を行う。まず，共起する身体部位語彙を収集し，目視で用例を確認して不適切な例[(3)]や目的に合わない例[(4)]を除外する。結果を整理した上で，動詞の意味拡張と身体部位語彙の意味拡張について分析を行う。また，量的に必要な場合などには，『筑波ウェブコーパス』を対象としたNINJAL-LWP for TWC（以下，NLTと略）も利用し，その用例末尾の括弧書きにNLTと付すものとする。

3.1 「こわす」

3.1.1 「こわす」の意味

多義語「こわす」の基本義は，次のように記述できる[(5)]。

〈人（など）が，具体物に，強い力・作用を加えて，その形・機能・価値などを，失わせる〉

NLBでの検索では，こわす対象として頻度の高い具体物として「もの，物，鍵，壁，家，建物，塀，窓，箱」などがあり，「環境，自然，巣」などより多くなっている。「カメラ，パソコン，携帯」などの場合は，形よりも機能が損なわれ，価値がなくなることに焦点が移っていると用例の文脈から読みとることができる。そこで，上記の意味記述は，aとbに分けることができ，bから身体部位語彙との共起における「こわす」の意味につながると分析される。

a　人が，具体物（生産物）に，強い力を加えて，その形と機能を失わせる。

b　人などが，具体物に，強い作用を加えて，その機能や価値を失わ

せる。

次に，身体部位語彙と「こわす」の拡張義が共起する用例を分析していく。

3.1.2　共起語の出現状況と動詞句の意味

NLB でパターン頻度順 1 位の「名詞を…」を調査した。不適切な例や目的に合わない例（注 3，4 参照）を除くと，表 1 のようにまとめられる。同じ部位を指すと認められる語は，一つにまとめた。

表 1 「こわす」との共起語

身体部位語彙	頻　度
体／身体／からだ	89
お腹／腹	68
体調	17
肝臓，肩	各 5
心	4
ひじ，筋肉	各 3
喉，手首，拳	各 1

出現頻度の高い「お腹，腹」の用例を文脈を手がかりに読み解くと，下痢をするようなタイプの腸の不調を表すことが多く，原因は病原菌や食べ過ぎなどが見られる。『日本語大シソーラス』では，「腹を壊す」が記載されている 2.5721「病気・体調」の 03 に，「中毒する，当たる」という具体性のある表現があるが，「下る，下す，腹が下る，腹を下す」という基本度の高い語で腸の病状を現わす表現も見られる。「壊す」は症状に直接言及せず機能が損なわれる意を表しており，抽象度の高い上位語であることが分かる。例を挙げる。

（2） いくらおいしいからといって，食べ過ぎると必ずお腹をこわしてしまいますからご用心。

（竹内均編『頭にやさしい雑学読本』1991）

「体，身体，からだ」の場合は，用例によると，それまでの通常の仕事・生活などが続けられない体の状態に変化することを表すことが多く，原因は無理や無謀な行為などが挙げられる。例を挙げる。

（3） その頃母は，それまで，僕を一人で育てるため，無理をして働いていたことがたたって，体をこわしていた。

（笠原のり子『ザ・ミルキー・ウェイ』2002）

（4） いきなりコンクリートや長い距離を走ると体を壊します。

（Yahoo! 知恵袋，2005）

「体調」は身体部位の状態を表す語であり，3.2.2 で述べるように「くずす」とよく共起する語である。「体調をこわす」を，「体をこわす」または「体調をくずす」に言い換えてもほとんど意味が変わらないと判断される例もあるが，不調の程度や期間に関する印象が変わることもある。その場合は「体調をくずす」より「体調をこわす」「体をこわす」の方がより重い状態への変化を表しているようである。(6)’よりも(6)の方が，程度が大きく感じられる。

（5） 出張ラッシュが，続いている。体調を壊した。今日は，4 時間休暇をもらった。 （Yahoo! ブログ，2008）

（6） 体調を壊して動けなくとも電話くらいはかけられるし，旅行に出るのなら出発前に連絡をする筈である。

（藤井弘司『探偵手帳』2003）

（6）’体調をくずして動けなくとも電話くらいはかけられるし，旅行に出るのなら出発前に連絡をする筈である。　（作例）

「肩」の用例のうち，文脈から分かる肩の持ち主は野球選手（投手か三塁手）であり，「ひじ」は，相撲の力士と野球の投手である。また，野球では，「手首」の例が1例見られた。これらの身体部位をプロのレベルで働かせることができない状態へ変化することを表している。なお，用例(9)は，ひじの持ち主とこわす動作主とが異なる構造の例であり，こわすの基本義の意志性や他動性が活きていると考えられる。

（7）　福岡大学時代にも野球を続けるが，肩を壊し泣く泣く野球の道をあきらめた。　（竹森健太郎著『プロジェクト H』2002）

（8）　う～む，これでは桑田や西崎が消える魔球に挑戦しないのも当然か。こんなトレーニングに挑戦すると，あっという間に手首を壊して引退である。　（柳田理科雄『空想科学読本』1997）

（9）　あの人が左のひじを清國にこわされなかったら，もっと優勝していたでしょうし，まだ取れたと思います。
（杉山邦博『名調子・杉山邦博の大相撲この名勝負』1988）

「喉」は1例だが，NLT では 31 例見られ，その多くが声の出し方で無理をし，声帯の状態が悪くなって，それまでのような声が出なくなることを述べている。

(10)　ノドを壊してしまう多くの人は，このきゃしゃな「声帯くん」のみに重荷を背負わして，結果バーストしてしまっているのです。　（吉田顕編『ヴォイス・コントロール』2003）

3.1.3 「〈身体部位語彙〉を＋こわす」の特徴

「〈身体部位語彙〉を＋こわす」では，さまざまな身体部位語彙が使用され，「体，腹，肩，ひじ」など特定の部位の働きが損なわれることを，身体部位の所有者を主語にして表すことが示された。「こわす」は破壊動詞として「くずす」など他の動詞より抽象度の高い語であり，広く「形，機能，価値」を失わせる意味を持つ。拡張義においても「機能を失わせる」という意味で，さまざまな身体部位語彙に適用されていると言える。「肝をつぶす」のような，構成要素から全体の意味を推測しがたい慣用句は，「こわす」には見られない。

また，「体調」は身体部位には入らないが，「体調をくずす」と似たような意味で使用されている。

3.2 「くずす」

3.2.1 「くずす」の意味

多義語「くずす」の基本義は，国広（2006）や国語辞典等の先行研究と用例に基づいて分析すると，次のように記述できる。

〈人が，物や所に，力を加えて，もとの整った形を，失わせる〉

対象となる「物や所」は，①複数の細かい要素から成り，②全体として整った形を構成し，③その状態を維持しているもの，という特徴を有すると考えられる。また，「こわれる」過程の様態が明確には指定されていないのに対し，「くずれる」過程は具体性があり，多数の部分にばらばらになっていくと考えることができる。

NLB での検索では，くずす対象の具体物として，「山，崖，土手」や「塀，壁，城壁，屋根，足場」「豆腐，卵」などが見られる。「土手，屋根，足場」のように特定の目的のために造られた人工物の場合は，形が失われるとともにその機能も失われるが，「山，豆腐」などについては機能の要素は現れない。身体部位語彙との共起では，多くの場合「全体として整っ

た形を構成」という意味特徴が「くずす」の拡張義として写像されている。

そこで，基本義にもっとも近い拡張義として，〈人などが，整った状態にあるものに，何らかの作用を加えて，もとの形や配置を失わせる〉を挙げておくことにする。人が多数集まってつくる「列，隊列，陣」の全体の形（配置）の変化や，字の線の変形について使用されるものである。基本義と違って，この場合，不可逆性は背景化している。

3.2.2　共起語の出現状況と動詞句の意味

NLB でパターン頻度順１位の「名詞を…」を調査した。不適切な例や目的に合わない例を除くと，表２のようにまとめられる。同じ部位・意味を表すと認められる語は，一つにまとめた。

表２「くずす」との共起語

身体部位語彙	頻　度
体調／調子／コンディション／健康	277
姿勢／体勢／構え／体（たい）(6)	42
相好	41
表情／顔	36
膝／足／脚／正座／あぐら／居住まい	28
笑顔／笑い／笑み／微笑(7)	10
口調(8)	6
顔つき／無表情／顔貌／童顔／美貌／面持ち／面相／しかめっ面	各１
体躯	1

「くずす」と共起する名詞を見ると，「こわす」と比べて狭義の身体部位詞がかなり少なく，身体機能の善し悪しの状態や，身体の空間的配置等の状態に関する語彙が多くなっている。

表２のうちもっとも多い「体調」群は，(11)などからも分かるように，基本義の空間領域における変化から，時間領域における変化に拡張した用法と考えられる。ここでは，整った状態が失われるため，好ましくない状態への変化を意味している。「体調を崩さないように」という(12)のような言い方は，天候に関連する挨拶ことばのようなものであるため出現頻度が高いものと思われる。なお，「体をこわす」とは言うが，「体をくずす」とは言わないようである。

(11)　その後，私はふた月間体調を崩して教室を休んだ。
（『文芸誌「そして」にかかわった作家たち』2004）

(12)　毎日暑い日が続いていますね～ 皆さん体調を崩さない様にして下さいね～　（Yahoo! ブログ，2008）

(13)　体は重いし，キレも悪い。明らかにコンディションを崩していましたね。　（平山譲『名波浩泥まみれのナンバー10』1998）

「姿勢」群は，腰を中心とした身体の縦方向の形状に焦点を当てた用法であり，これは「膝，足」などと同じく「配置」に近い意味と言える。姿勢を保つには，筋肉の緊張が必要であり，それが緩んだ状態になるのが「くずす」である。

(14)　ずいぶん時間がすぎて，ようやく長七は姿勢を崩した。全身から，力が抜けたのである。
（笹沢左保『八丁堀・お助け同心秘聞』1996）

(15)　あのとき先生は大病されたあとで，立っているのが精いっぱいという状態でした。しかし最後まで立ちつづけ，構えを崩すこともなかった。　（高山幸二郎『剣道新・八段の修行』2004）

なお，「姿勢をくずす」には，抽象的な意味で使われた例が 61 例中 43 例と，具体的用法より多く見られた（表 2 の数には入れていない）。こちらは「強気，抵抗，謙虚，慎重」などの修飾語句を伴い，否定の形で使用されたものがほとんどである。配置の用法と同じく，「緊張を保って立場や態度を保つ」という意味であり，メタファーによるきれいな写像が見られる拡張義となっている。

「相好，顔，美貌」などの類は表情筋の動きによる眉・目・口元等々の「配置」の変化を表している。特別の感情が現れていない理性的な顔を整った状態として，それが感情で変化することを表す場合が多く見られる。(16)～(18)がこれに該当する。しかし，(19)のように，笑顔などの表情を維持しようと筋肉の緊張を保っている場合は，それが「整った状態」と捉えられ，否定文で変化しないようにすることを表す場合も少なくない。さまざまな名詞と形で使用されているのが特徴である。

(16)　先ほど消えるような声で林田と名乗った青年が立ち上がり，朝倉を見て顔を崩した。　（さだまさし『精霊流し』2001）

(17)　それまで，ゆとりの表情を崩さなかった鎌足の顔が，急激に引き締まった。　（黒須紀一郎『役小角』2002）

(18)　理恵よりいくつか上らしい，高級ブランドの黒のスーツに身を固めた長男の嫁が，整った美貌を崩すことなく感動して見せた。　（伊野上裕伸『特別室の夜』2004）

(19)　「でも他のお客さまのご迷惑になりますから，預からせていただきますわ」　スチュワーデスは笑顔を全く崩さず言う。　（林真理子『最終便に間に合えば』1985）

「膝，足」群は，2 本の下肢の曲がり具合，つまり配置の変化のうち，整った状態から楽な状態への変化を表している。基本義において，例えば

「山，崖」の形が維持されているのは，細かい部分を全体にまとめあげる力，あるいは緊張があるからであり，その緊張状態が失われると全体としての形を失う，という意味が，「楽な状態への変化」と対応すると考えられる。

(20)　最前列にはもう 3 人の中年女性が，畳の上に膝を崩して座っていた。　(Yahoo! ブログ，2008)

(21)　行儀のよい正座をくずして足を投げだし，「やれやれ，馬鹿な村人どものおもりもラクじゃない」

(高橋直樹『童鬼の剣』2003)

同様に「プロポーション」は，緊張感のない体形となる意である。(23) の「体躯」の例は，「美食」という無生物主語の文例である。

(22)　プロポーションを崩す原因となる 3 つの脂肪　セルライト・皮下脂肪・内臓脂肪の憎い奴らを同時にアタック。

(NLT　ミスパリダイエットセンターを検証｜痩身エステを辛口比較！)

(23)　もちろん，まだ十分にハンサムとは言えた。が，美食がスラリとした体軀を崩し，美酒が顔から生気を奪っていた。

(水沢蝶児『獅子と薔薇の銀河』1991)

3.2.3 「〈身体部位語彙〉を＋くずす」の特徴

「〈身体部位語彙〉を＋くずす」は，「顔／表情，足，姿勢－をくずす」類と「体調をくずす」類との大きく 2 種あると言える。前者には，さまざまな語句が使用されており，慣用句「相好を崩す」も含まれる。基本義の，「全体として整った形を構成し，その状態を維持している」という要

素と，他の拡張義における「列，隊列，陣」の変化や字の「線」の変形という空間的（視覚）要素との関連が認められる。「体調を－くずす」類では，そのような視覚的要素は背景化している。

また，「姿勢をくずす」は，人の態度へと拡張した用例が多く見られた。

3.3 「つぶす」

3.3.1 「つぶす」の意味

多義語「つぶす」の基本義は，次のように記述することができる。

〈人などが，具体物に，強い圧力を加えて，原形を失わせる〉

辞書記述や用例から分析すると，「面」で強い力を加えるという動作の様態と，変化結果が部分への分解ではなく形状の崩壊であるという要素があり，それが「くずす，くだく」との顕著な相違点であると考えられる。対象物は柔らかくても硬くても可能であり，変化結果も対象物の性質に応じて－じゃがいもと空き缶のように－異なる。また，典型的には「平たくする」という意味特徴を挙げることができそうである。これは，重力の方向に力を加えるのは比較的容易であることと関係があるかもしれない。

NLB での検索では，つぶす対象の上位 5 位は「時間，肝，暇，顔，チャンス」となっており，上述の基本義用法の語例は入ってこない。そこでより下位まで見ていくと，「じゃがいも，トマト，バナナ，卵，実」など料理の材料としての食べ物と「泡，缶／空き缶，箱，容器，巣」などの物が現れている。

3.3.2　共起語の出現状況と動詞句の意味

NLB でパターン頻度順 1 位の「名詞を…」を調査した。不適切な例や目的に合わない例を除くと，表 3 のようにまとめられる。同じ部位・意味を表すと認められる語は，一つにまとめた。

「肝をつぶす」は「ひどく驚いてうろたえる」意の慣用句で，NLB の

表３ 「つぶす」との共起語

身体部位語彙	頻　度
肝／肝っ玉	36
顔／面	14
面目／面子／メンツ	11
声／喉／のどぼとけ	6
目	1

ジャンルでは「書籍」における出現が多い。「肝」は，『新明解国語辞典』によると「動物の内臓。〔狭義では，肝臓を指す〕」で，「積極的な行動力の基盤」につながるという。人間の肝臓を「肝」と呼ぶことは現代語ではまずないが，「肝が－小さい／太い／据わる，肝を冷やす」といった他の慣用句があるため，その知識がある人には「肝」の意味を推測することができ，「肝をつぶす」も分解可能な慣用句となる。

(24)　丁度丑ノ刻だ。流石の隠居も肝を潰した。

（子母沢寛『逃げ水』1996）

「顔」群と「面子」群は，句全体としては同じ意味を表している。顔は個人を認識するためにもっとも重要な部分であるとともに社会性のある身体部位である。その顔が仮に物としてつぶれる（識別不能になる）ようなことがあれば社会に「顔」が向けられなくなることから，句全体の意味が構成される。

(25)「兄さん，さっきはどうもすみませんでした。兄さんの顔をつぶしちゃって」　（田中芳樹『創竜伝』1992）

なお，この慣用表現は，(25)のように「N1 が N2 の顔をつぶす」という形で現れることが多く，顔の所有者は文の主語と異なる用例が多く見られるが[9]，顔の所有者と文の主語が同一で「顔がつぶれる」と同じように使うことも可能である。

「喉」や「目」の句は，構成要素の名詞と動詞から全体の意味が推測できるタイプである。「喉」はこの場合「声帯」を指しており，声帯の機能は発声であることから，用例では「喉」と「声」の両方が出現している。「喉をつぶす」は喉の働きがかなり，あるいはほとんど失われた状態になることを表している。「声をつぶす」は NLT では 26 例見られ，(27)のように意図的に「喉がつぶれた時のような声を出す」意で使用されている例も複数見られる。低い声やかすれた声を指すものと思われる。この意味で「喉をつぶす」と表現している例はコーパスの範囲内では見られない。

(26)　また，歌手の場合は，きちんとしたトレーニングをしていないと簡単に喉をつぶします。最悪の場合は，しゃべる事さえままならなくなります。　(Yahoo! 知恵袋，2005)

(27)　青田坊を演じるにあたっては，「意識して声を潰している」と話す。
(NLT：オンエア直前 !!　第 1 話・第 2 話先行上映＋キャストトークショー「ぬら祭！」(その 2))

「目／眼－をつぶす」の用例は多く見られるが，多くは物として実際につぶす意であり，その機能を失わせることに焦点が移った使用例は少ない。(28)は一時的に機能を失わせる例と思われる。

(28)　両目を開けると，空の燃える黒さがぼくの目をつぶした。立ち上がったら，はるか彼方にひとかたまりになった星が震えている

のが見えた。　　（今福竜太ほか編『旅のはざま』1996）

3.3.3 「〈身体部位語彙〉を＋つぶす」の特徴

「〈身体部位語彙〉を＋つぶす」では，「肝をつぶす」の使用例が多く見られた。「肝」は人間の身体部位語彙として使用されることは現代語ではあまりなく，「肝」を含む複数の慣用句から抽出される意味を理解する人にとってのみ全体の意味が推測される動詞句と言える。また，「顔／面子－をつぶす」も多く出現しているが，統語構造が異なる使用例の方が多く見られた。残るのは，「喉，声，目」などであり，機能を損なう意味で使われる。「つぶす」は多様な拡張義を持つ多義語であるが，基本義の「原形を失う」意味は当然機能の消失を伴うことから，「原形を失うような強い力」と「機能の消失」という要素が，身体部位語彙と共起する「つぶす」に写像されていると考えられる。

3.4 「くだく」

3.4.1 「くだく」の意味

多義語「くだく」の基本義は，国語辞典等の先行研究と用例に基づいて分析すると，次のように記述できる。

〈人（など）が，かたい物に，強い力を加えて，細かい部分にする〉

NLB での検索では，くだく対象として頻度の高い具体物として「（様々な）骨，（様々な）岩／石，ガラス，氷，土，パン」など，自然物と人工物が現れている。典型的には，対象物よりかたいものを用いて，勢いよく力を加えるという要素が「くずす，つぶす」と異なる点である。また，結果的に元の形は失われるものの，機能を失わせるという要素は他の 3 語ほど強くない。

3.4.2　共起語の出現状況と動詞句の意味

NLB でパターン頻度順 1 位の「名詞を…」を調査した。不適切な例や目的に合わない例を除くと，表 4 のようにまとめられる。

表 4 「くだく」との共起語

身体部位語彙	頻　度
心	88
頭，手，体，肝胆	各 1
気，魂	各 1

共起語の語例が少なく十分な分析ができないため，『日本国語大辞典』（以下，『日国』と略）の「くだく」慣用表現を参考に，NLT で検索を行ったところ，「心」の他に「頭，肝胆，手，気，骨身」などに拡張義の「くだく」が続く用例が確認された。

「心をくだく」は慣用句辞典にも記載されている表現で，全体として「よい結果が出せるようにと，あれこれ苦心する」（三省堂編修所 2010：315）意となる。各構成要素の意味から全体の意味を推測するのはやや困難である。

「心」という語は，容器（身体部位）としても内容物（感情など）としても使用される語であり，手や足，顔などの表現が「物」から「機能」へと拡張しているのに対し，その逆方向への拡張ともとらえることができる。このような「心」の二面性の動機づけを分析すると，感情の変化によって心臓の鼓動が速くなったりゆっくりと落ち着いたりする現象は具体的で分かりやすく，両者が時間的に共起することから意味がずれるというプロセス（メトニミー）によるものと考えられる。感情は心臓と深く関わるという捉え方は生理的基盤に基づくものであり，容易に理解できる。

(29)　そして組合員一人ひとりにあった共済をすすめるために，組合員のくらしを知ろうとつとめました。一対一の対話に心をくだき，共に学んでいきました。

（高橋晴雄編著『発想の転換』，2001，365）

(30)　四季の素材をふんだんに盛り込むことに特に心を砕いているため，内容は季節により変わる。　（『祭りを旅する』2002）

『日国』によると，古くから「身，肝胆，手，頭，気」など様々な身体部位語彙を対象とした「くだく」との動詞句で，順に，「ある限りの力を尽くす。力をふるう」「懸命になって物事をする。心を尽くす」「あれこれと手段をめぐらす。さまざまに工夫をこらす」「大いに考える。工夫をこらす」「いろいろと心配する。心をくだく」などの意を表すという。「〈身体部位語彙〉を＋くだく」というパターンで，当該部位の機能を十分発揮し目的のために力を尽くすという，「心をくだく」と似たような意味を表していたようであり，現代語でもそれは活きていると考えられる。なお，力を尽くす目的は「～に」の形で現れることが多く，「～に〈身体部位語彙〉をくだく」の用例が多く見られる。

(31)　従って，テロをなくすために勝者がなすべきことは，敗者をさらに追い詰めることではなく，敗者の屈辱感をどうすれば救うことができるかに頭を砕くことだ，ということが分かる。　（NLT）

(32)　天下国家の為に肝胆を砕くということは尊い人道的精神であって，国士的感激のやむにやまれぬものであるが，之を抽象的に論じたり，感傷的に思うだけではなく，一たび実際問題として携わる時，そは実に容易ならぬ苦痛である。

（安岡正篤『王道の研究』2003）

(33)　オリゲネスは理論と同様に実践の面での養成にも気を砕いてい

るのである。　（小高毅『オリゲネス』1992）

（34）　その後岩倉なる癲狂院には，金満家の主人てふ触れ込みの患者一人殖えて，そが妻と覚しき美しき女の，七ツばかりなる女の子携へたるが，絶えず見舞に来りて，骨身を砕くいたわり方を，見るほどのものいとしがらぬはなしとかや。

（NLT 清水紫琴　心の鬼）

3.4.3 「〈身体部位語彙〉を＋くだく」の特徴

「〈身体部位語彙〉を＋くだく」では，慣用句「心をくだく」の用例が圧倒的に多く見られた。その他の「頭，肝胆，気」などの句も，さまざまな努力をするという意味で似たような使い方がされている。「くだく」の基本義からの直接的な写像は見られないが，人の動作・行為を表す動詞の場合，「目的」に焦点が移ることは珍しくない。「硬い物はそのままでは受け入れられにくい，細かくすれば受け入れられやすい」ことから，目的（「〜に」の内容）のために受け入れやすい形にする，という拡張のプロセスが考えられる。これについては今後さらに検討したい。

3.5　対応する自動詞句

最後に，「肝をつぶした」に対する「肝がつぶれた」のように，意味的・統語的に対応する自動詞句の存在について，NLB の用例をもとに簡単に触れることとする。

「こわす」にはいわゆる慣用句は見られない。「こわれる」は，特定の身体部位ではなく全体を表す「体／身体」などの語句においては，「体がこわれる」という対応する例が見られる。また，意味的には非対応の句として「心がこわれる」という表現も見られる。

（35）（労働時間が 6 時間なら少なくとも 45 分）体が壊れるとあなた

が困りますから。　（Yahoo! 知恵袋，2005）

「くずす」には「相好をくずす」という慣用句があり，対応する「相好がくずれる」も NLB では「くずす」41 例に対し 1 例見られる。「体調」や「顔／表情」も対応する用例があるが，「くずす」ではさまざまな「顔」の関連語彙が使用されるのに対して「くずれる」では限定的である。一方，「膝，腰」の場合は，意図的な配置の変更ではなく，(36)のように立ったり歩いたりしようとしてうまく機能しない現象を指しており，形態的には対応しているが意味的には対応していない。

(36)　でも，岡島の顔を見た途端力が抜けて，立ち上がろうとしていた膝がへなへなと崩れた。
（高岡ミズミ『ハッピーハーレム』2003）

(20)　最前列にはもう 3 人の中年女性が，畳の上に膝を崩して座っていた。　（再掲）

「つぶす」の慣用句「肝をつぶす」に対して，数は少ないが「肝がつぶれる」の用例が見られる。「面目，顔」「目」なども，(37)のように対応する用例がある。一方で，「つぶれる」では「胸がつぶれる」が多く見られる表現であるが，「胸をつぶす」は現代語では見られない。

(37)　王爺も尊重しなければいけない。中堂の顔がつぶれるようなことにはならないと保証しますよ」
（高陽著，鈴木隆康・永沢道雄訳『西太后』1994）

「くだく」で多く見られる「心」に関しては，「くだける」と共起すると(38)のように「意志・意欲がすっかり失われる」という意味になり，「心

をくだく」とは意味的に対とはならない。また，「くだける」は「腰，膝」と共起して「くずれる」と似た現象を表すが，こちらも「くだく」を使用した対の表現はないようである。

(38)　悲しみのあまり，心が砕けるほど辛い思いをしています。
（鈴木史楼『書のたのしみかた』1997）

(29)　そして組合員一人ひとりにあった共済をすすめるために，組合員のくらしを知ろうとつとめました。一対一の対話に心をくだき，共に学んでいきました。（再掲）

(39)　一度は腰がくだけて尻餅をつきそうになったとき，天井にとどくほど高くロビングをあげた。
（北杜夫『どくとるマンボウ医局記』1993）

以上，ごく簡単にではあるが，自他動詞句の統語的・意味的対応について述べた。この分野における詳細な分析は今後の課題としたい。

4. 結　語

身体部位詞を対象とする「こわす，くずす，つぶす，くだく」についてコーパスに現れた具体的名詞を調査した結果，「体」などや，「腹，顔，足」など特定の部位，「笑顔，顔つき，姿勢」など外形的状態，「体調」などの内的状態を表す語彙が見られた。詳細は，3 節に述べた通りである。

動詞句全体としては，動詞の拡張義を意味記述できる分解可能なタイプの表現と，構成要素に分解して意味を理解することの難しい慣用句とが見られた。前者は生産性があり，身体部位を表す名詞としてさまざまな名詞が使用されている様子が明らかになった。

破壊動詞 4 語について，ⅰその基本義と典型要素（括弧内の記述），ⅱ

身体部位語彙を対象とする表現における拡張義，ⅲ動詞句の特徴とを，以下にまとめる。（ⅰⅱにおける動作主は省略した。）

【こわす】

ⅰ　物に，強い力・作用を加えて，その形・機能などを失わせる

ⅱ　身体部位に，過度の負担をかけて，その機能を損なわせる

ⅲ　動作主体の身体部位の機能が損なわれることを幅広く表す

【くずす】

ⅰ　物や所に，力を加えて，もとの整った形を失わせる
（複数の細かい要素，緊張感）

ⅱ①　身体部位の細かい配置などを，緊張の緩んだ状態にする

②　体に負担をかけて，健康な状態を，そうでない状態にする

ⅲ①では，多様な名詞が現れており，生産性が高い

【つぶす】

ⅰ　物に，強い圧力を加えて，原形を失わせる（平たくする，不可逆性）

ⅱ　身体部位に，強い力や過度の刺激を与えて，ほとんど機能しない状態にする

ⅲ　慣用句としての使用が多いが，ⅱの拡張義としての使用も見られる

【くだく】

ⅰ　かたい物に，強い力を加えて，細かい部分にする
（かたい物で，勢いよく力を加える）

ⅱ　当該身体部位の機能を発揮し，目的のために力を尽くす[10]

ⅲ　慣用句「心をくだく」の類義的慣用句が存在する

対応する自他動詞句については，意味的な対応があるかどうかについても検討し簡単に触れた。詳細な調査・分析は今後の課題としたい。

《注》

（1）　物体部分詞への拡張を論じた論考であるためか，外から観察できない内臓などは含まれていない。また，「右目」のような複数の形態素から成る語も外している。

（2）　宮地（1982：238）の分類と用語による。

（3）　例を挙げると，「3チーム目を潰す」は「目をつぶす」の数から除く。

（4）　例を挙げると「顔をつぶす」のうち，物としての「顔」を物理的に破壊する意の例は除外する。

（5）　遠藤（2009）による。

（6）「体勢」の意の用例が4件ある。

（7）　すべて否定の文である。

（8）　すべて否定の文である。

（9）「Nが（自分で）自分（＝N）の顔をつぶす」のように，「自分の」をつけた形では，動作主体と顔の所有者が同一の使用例が見られる。

（10）　細かい部分にすることで受容されやすくなるという推論からの意味拡張と考えられるが，分解できない慣用句に相当し，基本義との直接的な関連は明確ではない。

参考文献

有薗智美 2008「分解不可能な慣用表現の慣用的意味の成立 ──〈身体の状態（の変化）〉から〈精神状態（の変化）への意味拡張〉」『日本認知言語学会論文集』8：263-273

石田プリシラ 2004「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法 ── 統語的操作を手段として ──」『国語学』55-4：42-56

遠藤裕子 2008「「割る」と「切る」の意味拡張 ── 数値・数量を表す用法 ──」『拓殖大学語学研究』117：57-80

遠藤裕子 2009「動詞句の意味拡張に関する一考察 ──「こわす」の非典型的用例と意味の慣用化」『拓殖大学語学研究』120：129-147

北原保雄編 2021『明鏡国語辞典第三版』大修館書店

国広哲弥 1985「慣用句論」『日本語学』4：4-14　明治書院

国広哲弥 2006『日本語の多義動詞』大修館書店

国立国語研究所編 2004『分類語彙表 ── 増補改訂版』大日本図書

三省堂編修所 2010『故事ことわざ・慣用句辞典第二版』三省堂

高尾享幸 2003「メタファー表現の意味と概念化」『認知意味論』187-250　大修館書店

田中聡子 2002「口の慣用表現 —— メタファーとメトニミーの相互作用」Issues in Language and Culture (3)：5-20 名古屋大学国際言語文化研究科
西尾実，岩淵悦太郎，水谷静夫他編 2019『岩波国語辞典第 8 版』岩波書店
日本国語大辞典第二版編修委員会，小学館国語辞典編集部編 2000-02『日本国語大辞典』（WEB 版） 小学館
松本曜 2000「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張：その性質と制約」坂原茂編『認知言語学の発展』295-324　ひつじ書房
宮地裕編 1982『慣用句の意味と用法』明治書院
籾山洋介・深田智 2003「意味の拡張」松本曜編『認知意味論』大修館書店
山口翼編 2003『日本語大シソーラス —— 類語検索大辞典』大修館書店
山田忠雄・倉持保男他編 2020『新明解国語辞典第八版』三省堂

用例資料

国立国語研究所・Lago 言語研究所　NINJAL-LWP for BCCWJ
https://nlb.ninjal.ac.jp/
筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所　NINJAL-LWP for TWC
https://tsukubawebcorpus.jp/

（原稿受付　2021 年 10 月 27 日）